

でもよかったみたい。お袋など父が早く亡くなったせいで、農作業をする男手がほしくて早く卒業してもらいたいふうでした。こういう事情で、小学六年生で馬使いを覚え、田畑を鋤いていました。また馬、乳牛、羊の世話や乳しぼりは一人でやりましたよ。今はどこの農家でも機械ばかりですが、当時は馬を二頭づつ、位飼っていましたからね。

中学生の頃なんか、弁当も持っていかず世話をしましたよ。昼休みに一度家に帰り、牛馬や羊をえさをやってから自分が昼食をし、また学校に行くというふうでした。まあ、学校との距離が数分と近かったせいでしょうか。もうできたのですが。朝から、おみをはしたり、牛馬を外に出したりしてきて、授業中に天気が悪くなったりすると気がかりになり窓から外ばかり見てたもので、先生からよく注意されたですね。しかし、先生も家庭の事情などよく知っていられたのでそんなにこたえなかったなあ。

姉達もよくお袋の手伝いをやってましたね。上の姉がお袋と朝早くから農耕に出かけ、下の姉が朝食の用意をし、学校に行くという具合に。

母、姉弟とお互に苦勞もしましたが、今思えば忍耐力もつき大変よかったみたい。

### 入門の動機

私は小・中学校のとき、相撲が特別に強かったわけではないんですが、足の文数が大きかったんですよ。それで中学を卒業して、姉が泗水町の田島という所に嫁いでいたものだから、農作業の手伝いにいったんです。そうしたら、そこに八方山関（田島出身の力士）の親父さんがこられて、「わあー孝ちゃん足の大きき」と言っておどろかれました。

「これだけ足があればいい体になる。相撲取りにはもってこいばい。」ということになり、それから、相撲取りに行かんか、行かんかと大変なんです。私がお袋に頼んでくれたので、今度は義理の兄に勧められてくれということになったところ、義兄がその気になっちゃって、「行け行け」ですよ。「俺は十六歳で志願して兵隊に行ったのに、お前は十七歳だろうが、戦争に行くぞ死ぬつとぞ。そこに志願していったのだから考えると、相撲取りは死ぬることはなかるうが。」と言われ、そんならいつかはまってみようかなと思つて、私が相撲取りになると言いだしたら、お袋なんか絶対反対なんです。当時、私はお袋を手伝い、農作業をやったので、お袋にしてみればようやく男手ができたというときに、ま

たいなくなってしまうということでしょう、大変なことですよ。近所近辺みな反対なんです。相撲取りになんかいいな、いったら死ぬるぞ」というふうには、しかし義兄ひとりにみんな寄り切られちゃいました。それで九州場所が終って、丁度、熊本で巡業があつていたので、翌日急ぎよ羽海部屋に入門ですよ。足が大きかったばかりに相撲取りになつたみたいで。（笑い……）

### 人並みをはずれよ

入門してしばらくすると、なんでこんなところに来たんだらうと思つた。朝早いのは、田舎でも早く起きて仕事をやっていたので苦にはならなかったが、股割りに泣かされた。新弟子みんなが体をやわらかくするためにやらされる基本の一つですが、股を両方に開いて胸をつくんですよ。最初のうちは、体が硬くて少しも曲がらないんです。それを兄弟子が毎日毎日背中を押して、ギョッギョッやるんですよ。これをやられたら階段が登れないくらい痛いんです。そしてある程度くると上から乗っかかれるんです。すると骨がポキポキポキと響いて、ペターッと胸が地面につくんですが、ここまでくるのが大変なんです。

けいこは、朝五時から申し合ひだったので人より先に起きてけいこをし、みんなが起きてくるころには、一汗かいていました。それから一緒に掃除をし、また、みんなと一緒に掃除をし、しました。けいこはやればやるだけいいということ、今思えばお袋が、本当によかつたなあと思うことを言ってくれましたよ。強くなりたかつたら、人の三倍けいこをしなければダメだよ。人並みは人並み”なんだ。その場をもたすためには人と同じだけやればいいいいんだけれど、それより上位に上がりたいなら三倍やらないとあがれないよと言つたんです。それでいつもその言葉を思い出してがんばりました。

### 十両のカベ

お袋に五年間だけ相撲を取らせてくれと言つて上京しましたので、五年して十両になれなかつたら帰るつもりでいたんです。だけど五年経つてもなれないもので、義兄が「オイ、いつ十両に上がるんだ。まだかまだか。」と催促するんですね。自分だけが賛成し。相撲取りになしたみたいになってましたからね。責任を感じたようだった。

そういうことで、武蔵川親方に、「な

んぼけいとしても体はふとらないしやめさせてくれ。」と相談にいったんです。親方が言うのには、せつかくよくなつてきたんだからもう少しがんばってみるなんです。結局、視方の意見どおりがんばつたんですが、七年かかってようやく十両に昇進したんです。

今だから言えるんですが、相撲年齢とこのうがあるんですよ。十年かかって幕内に昇進すれば、十年在位できるというふうな。気分が新たになるんですね。私の場合十年だったかな。

上位に昇進するときは、ちょっとしたきっかけがあるものなんです。私が十両に昇進したときは、長谷川関がきつかけなんです。当時、長谷川関はものすごく有望視されていたんです。その長谷川関と対戦し、もうちょっとというところまで追い詰めて結局は負けて全勝優勝されたんですが、この一番で非常に自信がついたんです。それで翌場所、対長谷川と同じ突っ張り戦法で七戦全勝優勝し、十両に昇進したんです。

相撲取りになつて一番うれいのは、十両に昇進するときです。十両の「カベ」はものすごく厚い。

### 初三賞

新十両で十勝五敗しまして、三場所所

筆頭まであがりました。しかし、三十九年十二月二十八日に、三役力士と申し合

い中に足を折っちゃつたんですよ。というのが私の得意技は突っ張りでしょう。顔を張つちやつたんですよ。そうしたら、おこつちやつてね。この野郎、もう一番」という具合ですよ。外掛けをかけるために切り替えされたもので、足がポキポキという訳です。また、どん底に落とされちゃつた。一場所休場して出場しましたが成績はよくなかつた。一場所休場しますとドン尻まで下がりますから、また、コツコツやつて、八場所幕内になりました。

十両になれば、幕内と思うし、幕内になれば一度でもいいから三役というふう

に、一段一段目標を定めてやりました。初三賞は四十二年の九州場所です。忘れもしませんが、この場所はうちの親父（羽海親父、元横綱佐田の山）が優勝し、私が敢闘賞とうちの部屋の場所みただだったから。初めてオープンカーに乗ってパレードしたんですが、大変寒くてほつたがちぎれるほどでした。プラスバンドを先頭に、スポーツセンターから東公園までだったんですが気分爽快でしたね。

### 思い出の一番

柏戸関を何とか一番負かしてやりたい一心で、本場所中だった一回だけ立ち合ひで逃げたんです。柏戸関の相撲は左前みつを取りにバーンと走つてきてましたので、これと福の花は立ち合ひでは絶対に逃げないという風説があつたのを利用して体をかわしたのだから、まんまとこの作戦が図にはまつて、みごとに決まつたんです。これには柏戸関も、まさか私が逃げるとは思つてもみなかったでしょうし、絶対突いてくると思つてつかまえようとしたんです。それが逃げたものだから土俵ぎわで、わあーと泳いでいるんです。その顔がなんともいえないかわいそうな顔で、しまつたという顔をしてるんです。結局、寄り切りで勝ちました。この一番が印象に深いんです。また、この夜銀座へ飲みに行ったんです。懸賞金で。そこに丁度また柏戸関が入つてきては合せになり、ギャーと指さして「福の花がいるー」と言うんですね。（笑）あとは北の富士を一発で倒したとか、パンパンついていてノックアウトをしたとかいのは何人かいます。

郷土力士が少なくて寂しいですね。

一時、熊本は相撲王国と言われたものです。熊本にはもう相撲でがんばるといふ人はいないのかなあと思うくらいです。失礼かもしれないが、目立つた力士がいないですね。うちの佐田の海は、もともと阿蘇出身なんです。大阪に戸籍を移しているのが大阪出身になっていきます。このほかに幕下の周詞が郷土力士では一番上ですね。現在六人ですが、以前は一部屋でこの位はいたんですがほんとに寂しいですね。

現代の風潮として若い人達は、体を使つたきつい、つらい職業は嫌いますね。楽しく食つていこうという事ですかね。

相撲界も一時、大学出身者が出世が早かつたがこの頃低迷していますね。スカウトに行つてから言うんですが、相撲界はきついのは確かにきついんだ。しかし、今はけいこで死ぬ目にあうとか、ろくに飯もくえないとか言うことは絶対にない。がんばつてみればいい事もあるよ。実力の世界なんだ。大学卒も中学卒も一緒で、けいこを真面目にやり強くなつたものの世界なんだと。

熊本の若い人で体力に自信のある人はせひ相撲でがんばってもらいたいですね。